

書評

Nicholas Griffin and Dale Jacquette (Eds.), *Russell vs. Meinong: The Legacy of “On Denoting”* (Routledge, 2009, xiv+384p.)

足立瑞樹

本書の背景にあるのは、2005年5月にカナダのマックマスター大学において開催された国際シンポジウムである。‘Russell vs. Meinong: 100 Years After “On Denoting”’と題されたそのシンポジウムには、各国から数多くの哲学者や論理学者が出席し、ラッセルとマイノングに関する41篇もの研究論文が発表された。本書は、そこにおける諸論文の中から15篇を選定し、それらを収録した論文集という体裁を採っている。

所収論文を類別すると次のようになる。ラッセルの理論を様々な観点から再解釈しようと試みるもの(1~2章、4~7章)、マイノングではなくフレーゲとの対比でラッセルについて論じるもの(3章)、ラッセル哲学とマイノング哲学の対立を直接的に描き出し考察するもの(8~9章)、そして両哲学者の理論における現代的問題を扱うもの(10~15章)。なお本稿では紙数の都合上、8章のマレクによる論文、‘Psychological Content and Indeterminacy with Respect to Being: Two Notes on the Russell-Meinong Debate’について詳しく見ていく。本書を評するにあたって、ラッセルとマイノングに

ついて対比的に論じているこの論文が、本書のタイトルを鑑みると最も適していると考えたためである。

本稿の構成はこうである。初めに、序論に沿った形でラッセルとマイノングの主な争点を確認する。次に、8章を取り上げ、本書の具体的な議論を紹介する。そして最後に本書の目的とその意義について、評者の見解を示すことにしたい。

さて、まずは編者であるD. ジャケットとN. グリフィンによる序論を見ていくことにしよう。ジャケットは論理学、形而上学、そして心の哲学といった幅広い分野を専門とする哲学者であり、グリフィンは著名なラッセル研究者である。何故に本書が‘Russell vs. Meinong’と題されたのか、そして‘vs.’の内容とは具体的にはどのようなものなのか。その答えは序論において明確な形で述べられている。

1905年、ラッセルの‘On Denoting’が発表された。この論文で彼はかの有名な「記述理論 (theory of descriptions)」を発表し、表示句を含む文にそれを適用することで、その文から表示句を完全に消去することが可能であることを示した。本書の序論においては、マイノングとの対比を明確に描写するために指示対象を持たない確定記述句を含む文についてのラッセル流の言語分析を取り上げ、記述理論について簡単に説明している。以下序論に従い、「現在のフランス王は禿である」という、指示対象を持たない確定記述句を含む文を記述理論によって

分析してみよう。上の文は次のように分析される。

$$(\exists x)(P(x) \wedge Q(x) \wedge (\forall y)(P(y) \supset x=y))$$

(ただし、 $P(x)$ ($P(y)$) は「 x (y) は現在のフランス王である」を、 $Q(x)$ は「 x は禿である」を表す)。

指示対象を持たない表示句を含む文をフレーゲは無意味であると診断したのだが、対してラッセルは以上のように読み替え表示句を消去することで、このような文は有意義ではあるが偽であると主張した。何故ならば $(\exists x)P(x)$ が偽であるため、連言によって結合した全体が偽になるからである。

そしてまさにこの点において、ラッセルとマイノングの対立が鮮明に浮かび上がる。ラッセルが偽とした $(\exists x)P(x)$ をマイノングは問題にはしない。それどころか彼は、分析され消去される以前の「現在のフランス王」という表示句が指示すると考えられる対象の存在を容認するのである。では、それは具体的にどういうことなのか。

記述理論の影響によって、現在に至るまであまり注目されることがなかった哲学理論は数多くあるが、そのうちのひとつがマイノングの「対象論 (Gegenstandstheorie)」である。マイノングは彼の師である F. ブレンターノから受け継いだ思考の志向性という観点から、非実在対象の存在を認める対象論を展開した。対象論においては、例えば黄金の山や円い四角等の非実在対象も、

現存している対象と等しく同一の意味論的枠組みの中で扱うことができる。何故なら対象論によれば、志向され得る対象はたとえ現存していなくとも、志向され表象されるという点において現存している対象と全く等しいものだからである。それ故、先の $(\exists x)P(x)$ は、ラッセルの主張に反してマイノングにとっては偽ではない(ただし後でも述べるが、マイノングが我々の心的側面から乖離した非実在対象の外在的存在性についてはラッセル同様、認めていないことに注意が必要である)。

対象論のこのような考え方は、対象はあくまでも外的なものであるとする記述理論の見解とは正反対のものであると言えよう。そのため序論では、両理論の差異は“intensionalism”と“extensionalism”との間の差異として指摘されている。さらにジャケットとグリフィンによると、記述理論と対象論はどちらも我々の非実在対象に関する常識的な直観に根付いた主張であると言われる。確かにこれは興味深い洞察であるとともに、現在まで続くラッセル派とマイノング派の対立をうまく説明してくれるように思われる。

以上のように序論から、両者の主要な争点が非実在対象にあることが確認できた。また他の所収論文では、両者の心理学的争点や知識に関する争点についても論じられている。いずれも両哲学者に関する最新研究であるため、一読の価値はある。

では次に、8章に収録されているマレク

による論文を取り上げて、その内実を見ていくことにする。以下、マレクの議論を追っていこう。

ここでマレクが特に注目して論じているのは、マイノングが提唱した「心的内容の理論」についてである。先述したように、非実在対象を認めるか否かでラッセルとマイノングは主張が食い違っていたわけだが、この問題はマレクによれば、心的内容を認めるか否かという問題へと還元される。つまり心的内容に関する両者の見解を理解することは、非実在対象を巡る対立を考察する際には不可欠なのである。

まずマイノングは以下の問いを提起する。ある人が例えば、「晴れていて嬉しいと感じている」ときと、「雨が降っていて嬉しいと感じている」ときとの差異は心的なものと言えるのか、と。確かに異なる表象における差異は、外的な異なる対象における差異に由来していると言うのが妥当かもしれない。しかしマイノングはそうではないと主張する。何故なら彼にとって異なる表象における差異は、異なる心的内容における差異だからである。心的内容は表象（主観）や対象（客観）とは独立に存在しており、我々の持つ表象をうまく説明してくれる。では、心的内容とは具体的にどのようなものなのか。

マイノングにとって心的内容は表象にとって本質的なものである。例えば「黄金の山」という表象の場合、表象される対象である黄金の山が現実に存在していなくても、

それについての心的内容は存在する。また「AとBの間の差異」という表象の場合も同様に、それは外的な対象間における実際の差異ではなく、Aの心的内容とBの心的内容との間の差異として考えられる。このことを踏まえると、マイノングにおいて先の非実在対象を認めるとはつまり、その対象の心的内容の存在を認め、同時にその対象の表象を我々が持つことを認めるということだとわかる。この意味でマイノングが、先述の通り非実在対象の外的存在性については認めていないことは明らかである。

では、これに対してラッセルはどのように応答したのだろうか。ラッセルの「知識の理論」によると、主観と客観の関係は「見知り」であると言われ、見知りから我々の表象は構成することが可能である。ところで、ラッセルはマイノングのように主観と客観との間に内的な第三者を想定することは余計だと考える。すなわち見知りはあくまでも主観と客観との間の外的関係であるため、例えば先述した「黄金の山」という非実在対象の場合、ラッセルによると我々はそれを見知ることはできない。つまり結果として、非実在対象の表象を構成することはできないのである。

ここで特筆すべきことは、ラッセルは心的内容の非存在やその矛盾を証明し、全面的にマイノングを論駁したわけではない、ということである。そうではなく彼は、自身の理論を提示することによって心的内容の想定は不要であると結論したのである。

このことの背景にはマレクが述べるようにやはり、ラッセルのマイノング心理学に対する一定の評価と信頼があると考えられる。

しかしラッセルとは異なり、マレクは次のことを指摘してマイノングを批判する。まず、「赤い円」などの複数の心的内容を必要とする複合物の表象はどのように構成されるのかという問いについて、明確な回答をマイノングの著作から得ることはできない。さらに心的内容と対象との間の関係性をマイノングは「妥当関係」と呼び、妥当関係は現実的な関係ではなくあくまでも観念的な関係であるため、内的な心的内容と外的な対象との間の断絶を埋め両者の論理的な相関関係を可能にすると説明するのだが、妥当関係はどのようにして理解され得るのかについても、マイノングは十分な説明を与えていない。それ故マレクはこの心的内容の理論の根本に関わる妥当関係を、“mysterious”と形容している。

マレクの批判は知識の理論にも及ぶ。ラッセルは「普遍」の表象についても他と同様に、見知りによって可能になると考えた。しかしマレクは、例えば「普遍的な青」という表象は、「普遍的な青」という見知りに端を発するはずがないと言う。何故ならマレクによると、普遍という外的対象が存在しない以上、それと思考との関係は全く自然的・因果的關係ではないからである。結果としてマレクは、普遍に関するこの関係も先の妥当関係と同じく“mysterious”なものとして批判するに至る。

以上をまとめよう。非実在対象の問題は心的内容の問題へと還元され、それを認めるか否かが争点であった。そして論者は、双方ともに疑義を呈する余地があると診断したのである。けれども評者の見解としては、マレクの診断も十分ではないと思われる。何故ならマレクは対立の分析には見事に成功しておりその点は評価し得るが、新たに浮き彫りになった問題に対して自身の回答を示していないからである。この論文から、両派の決着がいかに困難であるか顕著に窺い知ることができるであろう。

さて、最後に本書の目的とその意義について触れることにしたい。編者も述べている通り本書の目的は第一に、現代における両派の対立を多角的な視点から論じることである。その見取り図を提示することである。と同時に、ラッセルによって葬り去られたと一般には考えられているマイノング哲学の再評価も意図している。果たして本書はこれらの目的を達成しているのだろうか。前者については、所収論文の内容を鑑みれば首肯できるに違いない。しかし後者については評価が分かれるであろう。何故なら所収論文の多くが、ラッセルを擁護・評価する論調に傾倒しているからである。

けれども本書は、マイノング哲学を見直す契機には十分なり得る。そしてそれこそがまさに本書の持つ意義である。評者としては、今後のマイノング研究がさらなる進展を遂げることに期待したい。